

追悼 内田 豊氏

弔 辞

内田 豊先生の突然の訃報に接し、私ども日本天文学会会員一同、誠に痛惜の念に耐えません。あまりにも突然のご逝去、ご遺族の悲しみは察するに余りあり、お悔やみの言葉もございません。ここに日本天文学会を代表して、先生のご業績を述べ謹んで哀悼の意を表わさせていただきます。

内田 豊先生は、昭和33年に東京大学理学部物理学科天文学コースを御卒業になり、昭和37年に博士課程半ばにおいて東京大学理学部天文学教室の助手となりました。その後、昭和40年に旧東京天文台に移られ、講師、助教授を経て、昭和53年に教授になりました。その後、昭和62年に東京大学理学部天文学教室に移られ、平成6年に東京大学を停年退官されたのち、東京理科大学に新しい天体物理研究室を創設されたのは、皆様よく御存知のことと思います。

先生はこの間、プリンストン大学、High Altitude Observatory, Harvard 大学、マックスプランク研究所などに数年間に渡り客員研究員として滞在になり、国際的に著名な研究者として活躍されました。

先生のご専門は、天体電磁流体现象の理論的研究です。特に、コロナ加熱やフレアなどの太陽活動現象の研究では、長年にわたって世界をリードして来られました。とりわけ、太陽フレアから発生するモートン波がコロナ中を伝わる電磁流体衝撃波であることを解明した研究は内田理論と呼ばれ、太陽物理学の教科書に載るなど広く世界に知られています。また、宇宙ジェット現象などをはじめとする様々な活動現象の基礎が電磁流体力学にあることを世界に先駆けて示された功績は大きなものがあります。

これに関連して、日本における天体数値シミュ

レーション研究を発展するために、当時北海道大学におられた池内博士を旧東京天文台に招くなど、その環境作りに早くからご尽力されました。また同時に、わが国の理論家の先駆けとして、完成間もない45 m 宇宙電波望遠鏡を用いて星が誕生する領域に見られるジェット現象である双極分子流を観測され、その生成機構を説明するために世界的に有名な内田・柴田モデルを構築するなど理論と観測の橋渡しをする貴重な成果を挙げられました。近年も、VSOPを用いた活動銀河ジェットの観測的研究にもチャレンジされておられます。このような研究活動を通じて、天体観測研究グループにも激励と知的刺激を与え続けて来られました。

1991年に打ち上げられ、10年に渡って世界の太陽物理研究をリードした「ようこう」衛星プロジェクトでは、計画立案の段階からその実現へ向けて大変なご尽力をされました。計画が走り出してからプロジェクト・サイエンティストとして、国内外の協力体制の確立のために大きな貢献をされました。「ようこう」は、太陽フレアが発生するときには磁気リコネクションが中心的な役割を果たしていることを明らかにするとともに、太陽コロナがこれまで誰も想像していなかったほど激しくダイナミックに活動していることなどを発見し、世界の太陽研究に変革をもたらしました。このような太陽研究の歴史に残る素晴らしい成果が得られたのも、計画立案の段階からの内田先生の様々なご尽力の賜と言っても過言ではありません。

先生は旧東京大学東京天文台の将来計画委員会委員長として、「国立天文台」への移行に最大限の努力をされると同時に、東京大学における天文学の教育と研究の充実にも心を配られ、東京大学



内田 豊先生

内田 豊氏 略歴

1934年3月27日生	
1958年	東京大学理学部物理学科天文学コース卒業
1962年	東京大学助手（理学部天文学教室）
1965年	東京天文台講師
1978年	東京天文台教授
1987年	東京大学（理学部天文学教室）
1994年	東京大学を停年退官 同年東京理科大学に新しい天体物理研究室創設
1993年～1995年	日本天文学会理事長
2002年	8月17日急逝（68才） 勲三等瑞宝章

理学部天文学教育研究センターの設立・運営に大きな貢献をされました。天文学教室に移られてからは、同教室主任をはじめ、国立天文台運営協議会委員、同評議員、宇宙科学研究所運営協議会委員、核融合科学研究所客員教授など、学内外において多くの責任ある役割を果たされました。

先生は、日本天文学会におきましても、庶務理事、欧文報告編集委員、同編集長、評議員、監事などを務められ、1993年から95年にかけては、日本天文学会の理事長の重責を果たされました。庶務理事の時代には学会会計の立て直しに奮闘された他、日本天文学会欧文研究報告誌の編集には28年の長きにわたって携わり、その国際誌としての評価の向上に大きく貢献されました。

先生は日本を代表する研究者として早くから国際的に活躍され、国際天文学連合の太陽関係委員会の委員長や、国際誌 *Solar Physics* の編集委員を長らく務められました。多くの国際会議や海外の大学で招待講演や講義を務められたのは言うまでもありません。海外には、多くの友人、知人を持ち、その交流を通じて後輩の活躍の場を広げて下さいました。ここ数年も英国ケンブリッジ大学のバイス教授率いる天体電磁流体シミュレーション・グループと日本の天体電磁流体シミュレーション・グループとの交流に大変なご尽力をされ、

英国から次々と研究者が来日するという、日本の若手研究者には願ってもない国際交流の機会を作って下さいました。今秋11月にイタリアのトリエステで開かれる国際会議“*Flowing Universe*”でも招待講演をされる予定でした。

先生の一歩の業績であるモートン波の理論研究が、最近のスペース観測の発展によって再び脚光を浴びるなど、ますます先生のご活躍が期待されていたところ、突然のご逝去はまことに残念でなりません。先生が教鞭を取られ、スーパーコンピュータを用いた大規模シミュレーションなどを通じてこれからの天文学を担う若い研究者を育てておられた東京理科大学天体電磁流体研究室の悲しみはいかばかりかと想像いたします。また日本天文学会の指導者として長年にわたってご活躍いただいた先生のご逝去は、日本天文学会にとってもはかりしれないものがあります。

今、永別の時にあたり、先生が残された多くの業績を守り育てることをお誓いし、日本天文学会一丸となって、天文学の発展とその普及に尽くしてまいりたいと存じます。内田先生の魂がやすらかな眠りにつかれますようお祈りし、お別れのご挨拶とさせていただきます。

平成14年8月21日

社団法人 日本天文学会理事長 田原博人